

湯筆花の上海メディア遍歴——小報、ラジオ、越劇

森平崇文

キーワード：湯筆花、上海、ラジオ、小報、越劇

はじめに

中華民国期(1912-1949、以下民国期と略記)上海のメディアと聞いてまず頭に浮かぶのは、新聞であれば『申報』(1872-1949)、雑誌であれば『東方雑誌』(1904-1948)、グラフ誌であれば『良友』画報(1926-1945)、出版社であれば「商務印書館」(1897-)、映画会社であれば「明星影片股份有限公司」(1922-1937)、レコード会社であれば「百代唱片(Pathé)」(1909-1949)、劇場であれば「大舞台」(1909-1950)、映画館であれば「大光明電影院(*Grand Theatre*)」(1928-)、遊楽場であれば「大世界」(1917-)、ダンスホールであれば「百樂門舞厅(*Paramount Hall*)」(1932-1951)、あたりとなるであろう。一方、民国期上海を代表するメディア人としては、新聞界の戈公振(1890-1935)、出版界の鄒韜奮(1895-1944)、文芸界の孫玉声(海上漱石生、1864-1940)、演劇・映画界の鄭正秋(1890-1935)、などの名がまず挙がるであろう。さらには、百貨店「永安公司」を拠点に様々な文化娯楽事業を立ち上げた企業家郭琳爽(1896-1974)も外すことはできない。

本稿が対象とする湯筆花(1897-1995)は民国期の上海で活躍した雑文家、ラジオパーソナリティである。新聞や雑誌の投稿者からスタートし、その後プロの文筆家として身を立てたが、拠点となった媒体は、新聞といっても上記の『申報』といったクオリティ・ペーパー、大新聞ではなく、エンターテインメント情報が中心の一般大衆を対象とした小新聞(以下、小報と記す)、雑誌といっても『東方雑誌』のような総合誌ではなく、映画や演劇などの娯楽専門誌であり、加えて当時の文筆家があまり出演することのなかったラジオ放送であった。民国期上海のメディア人といっても、上記の大マスコミとそれらを率いた大メディア人とはあまり接点はなく、その周縁を拠点としていた。

湯筆花が民国期上海のメディアを研究する上でより注目に値する人物として浮上するのは、彼を特定の事業を自ら立ち上げてそれをメディアの1ジャンルとして確立した創業者的メディア人としてではなく、小報や映画、ラジオ、

地方劇など次々と誕生するメディアの勃興に立ち会い、それらに横断的に関与したメディア人として評価する場合である。民国期上海のメディア界には、包天笑(1876-1973)に始まり、徐卓呆(徐半梅, 1881-1958)、鄭逸梅(1895-1992)と続く、商業紙(誌)の編集、通俗小説の執筆の他、上海の新語流行語の由来、文壇、芸界、花柳界のゴシップ、劇評や映画評、商売往来、市井の瑣事、社会を賑わせた人物や事件にまつわる挿話などをコラムとして商業ジャーナリズムに投稿する雑文家たちの系譜がある。本稿では湯筆花をこの系譜の最後尾に連なるメディア人と位置づけている。

民国期上海の演劇、映画を中心とする芸能マスコミは、主に小報とラジオが担っていた。民国期上海の芸能界の隆盛は、劇場、映画館と観衆に加えて小報とラジオによって支えられていたともいえる。上海最後の小報として中華人民共和国(以下人民共和国と略記)成立直前の1949年7月に創刊された2紙『大報』と『亦報』であるが、『大報』は1952年3月に『亦報』に統合され、さらに同年11月に『亦報』が総合紙『新民晩報』に吸収されることで民国期以来の小報が上海から姿を消した。一方、民営ラジオ局も民国期には多い時で市内に50を超える民営局が競合していたが、政権移行後の1952年10月1日には市内の16の民営ラジオ局が1局に統合され、翌1953年にはそれが公営の「上海人民廣播電台」に吸収されるというかたちで消失したのである。民国期上海のメディアはここで1つの断絶を迎えたといえるであろう。小報と民営ラジオ局の消滅が上海における芸能マスコミ及び劇場と観衆の関係に大きな変容をもたらしたことは想像に難くない¹。

本稿は湯筆花の編集者や雑文家としての活動、及び彼が立ち上げたラジオ放送における「故事」番組の形態と変遷を、当時の新聞、雑誌記事や広告、公文書などの一次資料をもとに整理、分析を行い、それによって民国期上海の芸能、小報、ラジオとの関係を明らかにし、併せて政権移行が湯筆花のような雑文家、ラジオパーソナリティに与えた影響につき検討する。

1. 雑文と編集の時代

湯筆花(1897-)

別名福源、浙江省蕭山人、1984年に上海市文史館に入館。かつて『影戲春秋』、『影戲生活』の編集長や映画評論家、『紹興戲考』の編集長や越劇団の脚本・演出家を務めた²。

これは1984年、すでに80代半ばを過ぎた高齢で上海市文史館に入館した湯筆花を紹介したものである。ほんの僅かな紹介であるが、湯筆花の来歴を

1
1950年代の上海のラジオ放送に関しては、拙稿「ラジオと芸能—1950年代上海を例に」細井尚子編著『東アジア文化圏の芸態にみる「大衆」～観念・実体・空間～論文集』立教大学アジア地域研究所、2020年、116-135頁、を参照。



図1 湯筆花(右)、『勝利無線電』第12期、1947年2月20日

2
上海市文史館弁公室編『上海市文史館館員名録』、1988年、153頁。

知る上で、貴重な資料である。表1は湯筆花の民国期から人民共和国までのメディア遍歴をまとめたものである³。

表1を見れば、民国期それぞれ新興メディアであった小報、映画、ラジオ、越劇に次々と関わり、人民共和国以降は越劇の人材育成やマジック団体のスタッフとして働き、定年後は文化大革命期の空白を経て、最晩年の1980年代に上海市文史館館員となったことがわかる。本章では上記の情報を基に、『申報』掲載記事等の一次資料を中心に、編集者、雑文家としての筆花の来歴にボリュームを与えていきたい⁴。

表1 湯筆花(1897-1995)のメディア遍歴

時期	内容
1911	上海育才公学に学ぶ
1915	商務印書館に見習いとして入社
1921.9	『申報』に記事を投稿
1924	中華電影学校に入学
1925.3	映画誌『影戲春秋』を編集
1926	『遊芸画報』を編集 小報『新新日報』紙上で「捧角」論争を始める 小報『福爾摩斯』を編集
1928	小報『大常識』編集長
1930	映画誌『影戲生活』編集長
1932	映画紙『電影日報』編集長
1933	ラジオ放送に出演を始める
1935	「半沁園」のPR誌を編集
1936	上海市故事播音研究会が設立され、理事に就任
1938	『申報』紙上に越劇の劇評を掲載 越劇『盤妻索妻』を執筆
1939	上海市游芸聯誼社常任幹事に就任 越劇女優竺素の専集を編集
1946	上海市故事研究会の理事に就任
1951	越劇俳優の養成団体「群立越劇社」の副社長に就任
1952	再建された「張慧忠魔術団」に入団、広報を担当
1959	「張慧忠魔術団」を退団
1984	上海市文史館館員となる

湯筆花は1897年に生まれた。「筆花」という名前であるが、民国期上海の評論家、雑文家は筆名を用いる場合が多く、上記の「福源」という別名の方が本名の可能性が高い⁵。出身地として上記の浙江省蕭山(杭州市)以外に、江蘇省呉県(蘇州市)と記された記録もある⁶。上海の共同租界工部局が1901年に設立した育才公学にて学ぶ、との記録があるので就学時期は上海で過ごした⁷。表1によれば、1915年に中国を代表する出版社「商務印書館」に見習いとして入社している⁸。ここから湯筆花の長いメディア人生が始まった。

民国期上海を代表する大新聞『申報』には同紙への投稿者に対し、稿料を申報館会計処まで受け取りに来るよう呼びかける記事が定期的に掲載されている。1920年8月と10月のこの告知で列挙される人名の中に「筆花」の名が

3 前掲『上海市文史館館員名録』、孫世基「難忘越劇早期謳歌人—緬懷湯筆花先生逝世十周年」『戲文』2005年10月、60頁、陳元麟「百年越劇的三位幕後英雄」『世紀』2008年6期、54-57頁、をもとに筆者作成。

4 沈飛徳「湯筆花憶旧上海的小報」『檔案與史學』2001年第3期、62-64頁、は1987年に沈飛徳が行った湯筆花への民国期上海の小報に関するインタビューをまとめたものである。当時の上海の小報に関する概説が大部分を占め、特に目新しい情報がないのが残念であるが、本章でも適宜参照していく。

5 前掲「難忘越劇早期謳歌人—緬懷湯筆花先生逝世十周年」や「百年越劇的三位幕後英雄」でも、湯福源は原名と記している(それぞれ60頁、56頁)。

6 呉県を出身地とするのは、「上海市游芸協会會員代表名冊」上海市檔案館、Q6-5-597-83、1945年10月。

7 同上「上海市游芸協会會員代表名冊」。前掲「百年越劇的三位幕後英雄」によれば、1915年に商務印書館に練習生として入館したとある(頁)。

8 前掲「百年越劇的三位幕後英雄」、56頁。

確認できる⁹。ただし同記事に記載されているのは名前のみで姓はなく、直ちにそれが本稿の対象である湯筆花本人であると断定はできない。「湯筆花」という署名入りで『申報』に記事が掲載されるのは、翌1921年9月2日の「一個冤枉死的婦人」で、上海市内で実際に発生した事件の報告記事となっている。ここに新聞投稿者としての20代の若き湯筆花の足跡が確認できる。

「中華電影学校」は1924年、当時映画館「上海大戲院」を経営し、中国における映画産業の勃興に尽力した企業家の曾煥堂によって創設された映画専門学校である。現在の延安東路と雲南路の交差するあたりに校舎が設けられた。学生には年齢、学歴、職業は問わず、就学期間は半年間で、授業は19時から22時までであった。同校の開校期間はわずか9か月であったが、映画俳優の胡蝶、陳琴芳、湯傑、周空空らを輩出している¹⁰。湯筆花もこの中華電影学校に在籍していた¹¹。この時点ですでに20代後半の年齢であった湯筆花は、これを機に当時新興のメディアであった映画と関わるようになる。

中華電影学校は1年を満たず閉鎖となったが、湯筆花は翌1925年3月、平民書局より刊行された映画誌『影戲春秋』を編集者として創刊する。編集仲間、何味辛、程歩高、周世勳らがいた¹²。しかし同誌は編集方針をめぐる平民書局の出資者との意見の相違により、創刊から2か月、第13期まで刊行して停刊となる。翌1926年、湯筆花は小報『福爾摩斯』（1926-1937）の創刊号にて『影戲春秋復活宣言』を発表、今度は湯筆花単独で『影戲春秋』を『福爾摩斯』紙上にて復活させると意気込んだが、この創刊号のみで終わった¹³。『福爾摩斯』は『晶報』（1919-1940）、『羅賓漢』（1926-1949）、『金剛鑽』（1923-1937）と並ぶ民国期上海を代表する4大小報の1つである。湯筆花は創刊から同紙の編集に関わっていたが、2か月後の1926年9月15日には同紙からも離れた¹⁴。その一方で湯筆花は、『福爾摩斯』のライバル紙ともいべき『羅賓漢』の編集にも関わり、記事を投稿している¹⁵。つまり湯筆花は上海における小報の勃興にも大きく関与していたことになる。

民国期上海には新世界（1915年開設）、大世界（1917年開設）、先施樂園（1917年開設）、天韻樓（1918年開設）、新新遊樂場（1926年開設）、大新遊樂場（1936年開設）などの総合娯楽施設「遊樂場」が競合していたが、その多くが宣伝を兼ねた小報を刊行していた。新新遊樂場では劉恨我が編集長の日刊紙『新新日報』（1926年2月1日創刊）を創刊したが、創刊間もない1926年3月から7月にかけて、紙上にて「捧角」（役者への鼠兎）に関する論戦が展開された。その発端となったのが湯筆花の記事「談捧角」である。芸術性を無視した過度な役者への鼠兎、とりわけ過度な掛け声に対して戒める内容であるが、湯筆花の攻撃的筆致が反響を呼び、複数の反論記事が同紙に掲載、それに対し湯筆花が逐一再反論の記事を掲載することで、論戦は5か月近くに及んだ。合計で21篇の記事を投稿した湯筆花であるが¹⁶、最終的に湯筆花が創刊され

9 『申報』1920年8月2日、10月1日。

10 《上海電影志》編纂委員會編『上海電影志』上海社会科学院出版社、1999年、166頁。

11 湯筆花「明星穿土布」『新民晚報』1982年7月9日。

12 前掲『上海電影志』、689頁。

13 『福爾摩斯』1926年7月3日。

14 李楠『晚清民国時期上海小報』人民文学出版社、2006年、394頁。ちなみに同上の『福爾摩斯』創刊号には、「湯筆花啓事」という記事があり、湯筆花は『遊芸画報』の編集と広告事務を辞したため、今後は『福爾摩斯』紙に連絡先を変更すると告知している。このことから湯筆花は『遊芸画報』の編集もしていたこと、編集以外に広告業務も担当していたことが分かる。

15 湯筆花「范少山逝世始末記」（上）（下）『羅賓漢』1928年2月8日、11日。同上の『晚清民国時期上海小報』によれば、『羅賓漢』において湯筆花は創刊間もない1926年、編集長の朱瘦竹の依頼で魯禹門とともに同紙の編集に協力していた（395頁）。湯筆花と『羅賓漢』との関係については前掲『湯筆花憶旧上海的な小報』でも沈飛徳が湯筆花に関する紹介で触れている（62頁）。

16 『新新日報』に掲載された湯筆花の「捧角」に関する記事は以下の通りである。「談捧角」（1926年3月3日—以下月日のみ）、「黃文農湯筆花緊要声明」（3月27日）、「告新茶房」（4月17日）、「再談捧角（上）」（4月22日）、「再談捧角（下）」（4月23日）、「3月27日」、「覆趙秋帆」（5月7日）、「駁蔡鈞徒」（5月8日）、「斥有髮和尚」（5月9日）、「三談捧角」（5月14日）、「無鬚道士聽着」（5月18日）、「為倒戈事鄭重声明」（6月2日）、「再駁蔡鈞徒」（6月4日）、「湯筆花覆趙秋帆書」（6月6日）、「忠告捧角家」（6月8日）、「訓凌君」（6月11日）、「捧□□」（6月12日）、「湯筆花答季也狂書」（6月13日）、「答桃潭逸史」（6月28日）、「答朱春蚕對於捧角的幾個疑問」（6月29日）、「答捧角家」（7月2日）、「斥花老頭子」（7月3日）。

たばかりの『福爾摩斯』の業務で多忙なため、この論争を打ち切るという声明が『新新日報』より出され終結となった¹⁷。最晩年、湯筆花はインタビューにてこの論戦に関し、自分も参加した程度にしか述べていないが、むしろ論戦の発端を作った当事者というべき立場にあった¹⁸。小報の黎明期における、湯筆花をはじめ編集者や投稿者も少壮であった時代の熱い論戦である。ちなみに湯筆花自身も文明戯や京劇に関する劇評を『申報』に掲載しているが、確かに最員の役者を過剰なまでに褒めちぎるといった、湯筆花が批判する類いの劇評では決してない¹⁹。

1920年代から1930年代初頭にかけては、湯筆花が映画界と最も深く関係した時期である。上記の『影戲春秋』以外にも、1926年に映画会社「友聯影片股份有限公司」の出版部が映画『秋扇怨』公開を記念し編集した特刊に、「記秋扇怨影片」と題する記事を載せている²⁰。同特刊には湯筆花を含め20名以上が文章を寄せているが、中には徐卓呆や鄭逸梅ら、雑文家の先達も名を連ねている。

更に映画界との関わりでは、1930年12月に中国電影研究社によって創刊された週刊の映画誌『影戲生活』で主編（編集長）を務めている。中国電影研究社の名誉顧問には、楊小仲、卜万蒼、孫瑜、蔡楚生、程歩高ら映画監督の他、阮玲玉、龔稼農、黎莉莉、陳燕燕、宣景琳ら俳優の合計で76名の名前が挙げられている²¹。その宣伝広告に、「湯筆花氏が編集長の著名映画雑誌を見なければならぬ」というコピーがあり、湯筆花が映画評論界では一定程度の知名度があったことが分かる²²。名誉顧問の1人程歩高はかつて『影戲春秋』を編集した仲間であった。同誌では1934年の人気映画女優（電影皇后）を選出する読者投票を企画し、2月1日に八仙橋にある青年会（YMCA）にて結果発表会を開催したが、会場にて湯筆花は同誌を代表して選挙の経過報告を行っている²³。これ以外に、映画紙『電影日報』でも編集長を務めた²⁴。



図2 湯筆花主編の映画誌『影戲生活』広告
（『申報』1931年3月20日）

清代から民国期にかけ上海では、個人の庭園を一般に開放し、さまざまな集会が開かれ、芸能等のアトラクションに触れる娯楽空間が複数存在した。その代表的なものが共同租界西部、現在の南京西路にあった張氏味蕪園（張氏花園、1882-1919）である。華界の南市には1918年に入場料を取る庭園と

17 新記者「和平」『新新日報』1926年7月16日。

18 前掲「湯筆花憶日上海的小報」、64頁。

19 文明戯に関しては、「排練中之両新劇」『申報』1924年7月13日、で笑舞台を評し、京劇に関しては、「粉菊花之「紅梅園」」『申報』1924年7月21日、「楊宝森之「空城計」」『申報』1924年7月24日、がある。

20 『申報』1926年1月6日の「秋扇怨」特刊の広告を参照。ちなみに「秋扇怨」は監督が陳鏗然（1906-1958）、主演は胡蝶（1908-1989）で、友聯影片股份有限公司は1925年4月に陳鏗然らによって設立され、1932年に閉鎖された（前掲「上海電影志」、118頁）。

21 『影戲生活』第44期広告、『申報』1931年11月15日。『影戲生活』に関する先行研究として、武瓊『《影戲生活》雑誌と民国電影映画研究』山西師範大学修士論文、2020年がある。

22 同上。

23 「影戲生活選挙電影皇后揭曉」『申報』1934年2月2日。ちなみに前掲「上海電影志」では、『影戲生活』の停刊時期を1932年1月2日と指摘しているが（690頁）、本稿では『申報』記載の記事によりそれは採らない。

24 『申報』1932年6月7日には『電影日報』の宣伝が掲載されているが、同紙に関してはその詳細は不明である。

25 《南市区地方志編纂委員会》編『南市区志』上海社会科学院出版社、1997年、766頁。

26 半淞園広告、『申報』1935年7月11日、1936年7月25日。前者の広告記事によればこのPR誌は日刊で、湯筆花は編集長を務めている。

尹桂芳(1919-2000)の代表演目の1つとして現在も上演を続けている³³。

この他、湯筆花と越劇の関わりとして、1941年1月創刊の『紹興戯報』や、1946年5月創刊の『越劇報』といった上海における越劇の専門紙にも湯筆花の署名記事が確認できる³⁴。『紹興戯報』には、後世の資料には編集者として名が記されていないが³⁵、『紹興戯報』の創刊に関与したことを指摘する別の資料もあり³⁶、また前掲の上海文史館の紹介文にも『紹興戯報』の編集をしていたとあることから、ただの寄稿者に止まらず、深く関与していたことが窺える。当時新興の地方劇であった越劇に対し、湯筆花は劇評や劇作など、本業のペンによって側面から積極的に支援していたことが分かる。

本章では出版社への入社、『申報』への投稿に始まり、映画誌の編集、小報の編集及び映画評、劇評などの寄稿、『大常識』等小報の創刊、越劇という地方劇への小報というメディアを通じた肩入れなど、民国期上海における湯筆花のメディア遍歴について紹介してきた。湯筆花が上海のメディア界に登場した時期は、まさに中国における小報、映画の黎明期にあたり、湯筆花は編集者や雑文家としてこれら新興のメディアに成功裏に進出できたといえるであろう。更に1930年代後期、新興の地方劇として上海の劇界で台頭を始めた越劇にも、小報や劇作を通じて参与するなど、絶えず新しいものに対し敏感に反応、積極的に関与することに成功したといえる。ラジオ放送も1930年代はまさに勃興期にあたり、ラジオという新興メディアに湯筆花が着目し、参入していったのも、彼のメディア遍歴を考えると自然のことであった。

2. 怪談とラジオ

中国のラジオ放送は1923年1月、外資系の中国無線電公司広播電台によって上海で始まった。1927年3月には、中国系初の民営ラジオ局として上海南京路のデパート新新公司6階に、「新新広播電台」が開設される。1948年出版の『上海市大観』は民国期上海のラジオ放送を振り返り、「1929年より時代の要請でラジオ局が次々と創設され、商工業界がラジオ局を宣伝のため利用するようになった」と指摘している³⁷。1932年9月8日付の『電声日報』に掲載された全国のラジオ局は公営と民営を合わせて64、その内、上海市内には37局が設置されており、全国の6割近くを上海市内のラジオ局で占めていた³⁸。上海における公営ラジオ局が開設されたのは、交通部上海広播電台が1935年3月9日、上海市政府広播電台が1936年3月8日であるから、中国ラジオ放送の中心地上海のラジオ放送を主導していたのが公営ではなく林立する民営ラジオ局であったことがわかる。本章では湯筆花とラジオ放送との関わりを、彼が開拓し、1ジャンルとなった番組「故事」を中心に検討することを通じ、

33 前掲『上海越劇志』、144頁。前掲「百年越劇的三位幕後英雄」には湯筆花が手掛けた越劇の演目として他に、『紅杏出牆記』、『游寺認父』、『荒山冤魂』、『人面獸心』、『木乃伊』を挙げている(57頁)。

34 湯筆花「姚水娟の輿論」『紹興戯報』1941年1月11日、「可憐的雪娘(三)」『紹興戯報』1941年3月10日、「這一週」『越劇報』1946年8月25日などを指す。「可憐的雪娘」は連載の小説である。

35 前掲『上海越劇志』、280頁、に記載されている『紹興戯報』の編集者は舒夢飛、蔡萸英、魏紹昌、樊迪民の4名で湯筆花の名は挙げられていない。

36 「越壇点将録(三)湯筆花」『上海越劇報』1941年10月27日、に越劇の隆盛を目にした湯筆花が越劇界で権威のある魏紹昌、樊迪民、蔡萸英と資金を集めて『紹興戯報』を創刊したとの指摘がある。

37 屠詩聘『上海市大観』中国図書編訳館、1948年、下62頁。

38 「全国無線電台一覧表」『電声日報』1932年9月8日。《上海広播電視志》編輯委員会編『上海広播電視志』上海社会科学院出版社、1999年、20頁、によれば1934年1月の国際電信局の統計によると上海市内のラジオ局は51局に達している。

39 民国期上海のラジオ放送に関しては、姜紅『西物東漸与近代中国巨變—收音機在上海(1923-1949)』上海人民出版社、2013年、が非常に詳しい。湯筆花の写真も掲載されている(98頁)。第四章「広播与市民都市生活」において、ラジオ番組を「戯曲、曲芸」、「歌唱」、「唱片」、「話劇」に分けて詳細に紹介しているが(90-122頁)、本稿が扱う故事番組には言及していない。

40 民国期上海のラジオ放送における弾詞番組の隆盛に関しては、Carlton Benson, "The Manipulation of Tanci in Radio Shanghai during the 1930s", Republican China, Vol. 20, Issue 2, 1995, pp. 117-146、を参照。

民国期上海のラジオ放送の特徴について明らかにしていきたい³⁹。

1930年代、上海の民営ラジオ放送において最も人気の番組は弾詞の番組であった。弾詞は江蘇省蘇州を起源とする語り物芸能で、1人ないし2人の芸人が三弦や琵琶を演奏しながら歌と語りで上演する。小人数であることと、歌や語りの部分に広告の宣伝文を入れられる即興性、更に同じく蘇州を起源とするシルク産業が積極的に弾詞番組のスポンサーになるなどの理由により、ラジオ放送で重宝された⁴⁰。この時期、弾詞の歌のさわりだけに特化した「開篇」を聴取者がリクエストできるよう、開篇だけの作品集がラジオ局の編集で多く出版されている。その1つで、利利広播電台が刊行した『嫋嫋集』には、ラジオ局「利利広播無線電台」とその親会社「利利土産公司」の他、絹布を販売する「老九和綢緞局」、「光明大光明綢布染廠」、革製品を扱う「天堯祥皮貨局」、飲料メーカーの「金牛牌鮮橘水」、豆炭を扱う「東方象牌衛生煤球」、冠婚葬祭の品を扱う「源源永礼品局」をそれぞれ宣伝する開篇が収録されており、弾詞においてスポンサーの宣伝を直接的に入れ込む演目が確認できる⁴¹。民国期上海のラジオは、出演者がまずスポンサーを見つけ、ラジオ局から時間を買うという形で放送が成り立っており、出演者はスポンサーを探し、ラジオ局と放送時間について交渉し、更に自ら出演するという、出演者の果たすべき役割がかなり多かった⁴²。表2は1932年6月の上海のラジオ局で放送されていた弾詞番組の一覧表である⁴³。

表2には、15時15分から25時30分までの間に、12のラジオ局で28の番組が挙げられている。最も弾詞番組が多い局は東方と大中華でそれぞれ5番組となっている。民国期上海のラジオ番組は40分か45分が一般的であったが、表2には30分、60分単位の番組も確認できる。弾詞番組に含まれているが、『七侠五義』、『大紅袍』、『英烈伝』など明らかに弾詞ではなく、日本の講談に相当する「評話」を放送している番組もある。それらを差し引いたとしても、1930年代上海ラジオ放送において弾詞番組は相当多い。後ほど取り上げる「故事」番組もそうであるが、20時から深夜にかけて放送される番組が多い点からも、民国期上海のラジオ放送の形態は夜型であったようである。

日中戦争が終結し、戦時下における日本軍や当局による電波行政上の規制が緩むと、上海では再びラジオ局が多く設立され、活況を呈するようになる。表3はこの時期の1946年12月におけるラジオ番組をジャンル別にまとめたものである⁴⁴。

- 41 倪高風編『嫋嫋集』第二期（開篇専号）、利利無線電台、1934年、開篇1-3、5-14頁。
- 42 湯筆花「播音生活」『申報』1939年2月3日。
- 43 「本埠播送彈詞節目全日時間表」『電声日報』1932年6月23日をもとに筆者作成。
- 44 「播音節目分類表」『勝利無線電』第10期、1946年12月25日をもとに筆者作成。

表2 上海ラジオ放送における弾詞番組一覧

放送時間	ラジオ局	出演者	演目
15:15-16:00	東方	汪雲峯	金槍伝
15:30-16:30	亜声	陳瑞林	九絲套
16:00-16:45	東方	周玉泉	玉蜻蜓
16:00-17:00	美靈登	劉祖韻、王似泉	三笑
16:30-17:30	樹德堂	王蘭蓀	落金扇
17:00-18:00	大中華	韓士良	七侠五義
17:30-18:30	国華	蔣如庭	三笑
	建華	陳士林	果報録
18:00-19:00	亜美	朱介生	落金扇
18:30-19:30	国華	周玉泉	玉蜻蜓
19:00-20:00	孫氏	張少蟾	双金錠
19:00-20:00	亜声	楊慎麟	双珠球
19:15-20:15	大中華		果報録
	友聯	魏鈺卿、魏含英	珍珠塔
19:30-20:30	落金扇	蔣如庭、朱介生	落金扇
19:45-20:45	亜美	陳昌浩	双珠球
20:00-20:45	東方	劉天韻、王似泉	三笑
20:00-21:00	華東	蔣寶初	三笑
20:00-21:00	大中華	趙筱卿、趙鶴声	大紅袍
20:45-21:15	東方	許繼祥	英烈
21:00-22:00	大中華	張少蟾	双珠扇
21:10-22:10	東方	楊稼	四香緑
22:00-23:00	昌明	楊仁麟	白蛇伝
22:00-23:00	大中華	張雲庭、余小霞	玉蜻蜓
23:00-24:00	亜声	楊斌奎、楊振雄	描金鳳
23:00-24:00	国華	陳昌浩	白蛇伝
23:30-24:30	樹德堂	陳蓮卿、祈蓮芳	双珠扇
24:00-25:30	樹德堂	陳蓮卿、祈蓮芳	小金錢

表3によれば、突出して多いのがレコード番組であるが、これは経費という点で最も効率的であり、且つリクエストという聴取者の意向を反映しやすい番組進行が可能であるため、納得ができる。次に多いのがニュース関係の番組であるのもラジオ放送の特性からして首肯できる。注目すべきは滑稽(独脚戯等の別称は多数あるが本稿では以下、滑稽で統一する)で、弾詞・評話を抜いて3位に位置している。弾詞以上に即興性に富み、世相を反映しやすい点でラジオ向きの芸能であった。一方、越劇や京劇の番組が比較的少ないが、それは両劇の人气がすでに確立されており、花形役者たちの拠点が劇場にあったことの証左で、京劇の場合、ラジオ放送ではプロの役者以上にセミプロによる出演が多かった。本稿が対象とする故事も23番組で、番組数としては上位に位置している⁴⁵。

湯筆花のラジオ放送への進出に関し、湯筆花は1939年に『申報』紙上にて「播音生活」と題し3回にわたり自らのラジオ放送の実態に関する記事を投稿している⁴⁶。そこでは、「私のラジオ人生もうすぐ6年になります。放送しているのは「故事」で、幸い副業的にやっております。そうでなければ生活などできません。多くのラジオ出演者たちの生活を見ていますと実に悲惨です」と語っている⁴⁷。これを根拠とすれば、湯筆花がラジオ放送に進出時期は1933年前後と推測できる。ただし湯筆花のラジオ放送の開始日を特定することは難しい。1933年2月、後に故事番組を多く担当するようになる徐卓呆は「笑話」、裴揚華は「滑稽」という番組名で放送しており、「故事」とは称していない⁴⁸。1933年9月の番組表を見ても、大中華ラジオ局にて19時から45分間の「故事」というのが確認できるが、出演者の名前はない⁴⁹。1933年10月の番組表でも富星ラジオ局にて18時から60分、「故事或滑稽」の番組が確認できており⁵⁰、番組の担当者が湯筆花であるかどうかは置くとして、1933年あたりから「故事」という名を冠したラジオ番組が登場していたことが確認できる。ラジオ放送にて湯筆花が故事番組を担当していることに関しては、1935年2月の『申報』に、「亜声ラジオ局で放送中の陳昌浩が出演する四明南詞の番組を、湯筆花氏が『聊齋志異』を語る番組に変更する」との記事が確認でき、この段階ですでに故事番組を担当したことは確かである⁵¹。1933年前後に故事番組が始まったとすると、湯筆花は最初期からであると断言はできないが、少なくとも初期からすでに故事番組を担当したことになる。

では一体故事とはどのような番組であったのか。1939年6月と1947年2月の番組表から明らかにしていきたい。表4は2つの時期における故事番組の出演者とその内容をまとめたものである⁵²。

表4からは故事という番組が包摂するものの広さが一目瞭然である。内容から見ていくと、まず古今の小説を語るものが多い。『霍桑探案』などの探偵小説、『蜀山劍俠伝』、『江湖奇俠伝』などの武侠小説、『清宮十三朝』などの

表3 上海ラジオ放送における番組別一覧(1946年12月)

ジャンル	番組数
レコード	197
消息(報道)	63
滑稽	44
弾詞・評話	42
歌唱・音楽	31
その他	29
滬劇	27
故事	23
常識	23
教育	23
四明南詞・四明文書	16
越劇	15
話劇	11
京劇	5
児童番組	4

45

表2の「その他」は筆者の分類ではなく、典拠資料にあるもので、仏学講座、哲学講座の他、改良甬劇、江淮戲、寧紹彈唱、常錫文戲、蘇州文書、時代小曲、什錦小曲などの芸能番組が列挙されている。

46

『申報』1939年2月3日、2月4日、2月5日。

47 同上、1939年2月5日。

48

「各電台明日節目」『電声日報』1933年2月3日。

49

「全国電台固定節目表」『電声日報』1933年9月14日。

50

「全国電台固定節目表」『電声日報』1933年10月9日。

51

「無線電播音節目」『申報』1935年2月26日。

52

『無線電』第六期(越声専号)、四而社、1939年6月、48-72頁と「播音節目分類表」『勝利無線電』第12期、1947年2月20日、頁数なし、をもとに筆者作成。

演義小説、『紅杏出牆記』、『人間地獄』などの通俗小説、『聊齋志異』などの怪奇小説、『碧玉簪』、『狸猫換太子』など舞台化もされている物語りなど、実に多岐に渡っている。湯筆花も表4の1939年6月の方で「文素臣」を語っているが、これは清代の白話小説『野叟曝言』の主人公の名前であり、小説の語りにも属する。小説を題材としたもの以外にも、教育、児童、夫婦に関するものや、歴史に関するものも確認できる。表4の1939年6月の方で18時から放送されている「竺規身教士伝」は宣教師に関するものであろう。これ以外にも、「描音戯」や「絵音戯」、更に「粵楽」など明らかに芸能ジャンルに属する故事番組も確認できる。前2者はラジオドラマの一種である可能性が高い。

湯筆花がラジオの故事番組で語ったのは「文素臣」に止まらない。前述の湯筆花が編集していた半淞園の広告には亜声ラジオ局で18時10分から『聊齋志異』、麟記ラジオ局で19時10分から20時まで『四傑伝』を語ると記されており⁵³、自ら編集し出版した『奇奇怪怪』を亜声ラジオ局にて18時10分から語るという記事もある⁵⁴。さらに故事の話をまとめて自ら編集した『故事一百種』も出版している⁵⁵。1935年12月には元昌ラジオ局にて、9時半から10時までは「常識講座」、18時10分から19時までは「新奇故事」を放送している⁵⁶。時代は下り1949年3月には、方正と共に滬軍電台を1日借り切った仏教の供養特別番組にて、21時半から22時まで「因果」について語っている⁵⁷。

しかし湯筆花の故事番組というと、上記の『聊齋志異』や「因果」に代表される怪談を語ることで知られており、「業界内の人間であるかを問わず、私が怪談を得意とすることはよく知られている」と自認するほどであった⁵⁸。石鹸会社「日月肥皂」がスポンサーの故事番組では湯筆花が方正とのコンビで「全部鬼世界」（全てお化けの話）を放送すると宣伝しており、湯筆花といえは怪談というのは、湯筆花の自慢では決してないようである⁵⁹。ではなぜ湯筆花は怪談をラジオで語るのでしょうか。それに関し湯筆花自身は戦後内戦期の1946年に、怪談を語るのは、怪談を通じこの世の人間に警告を発するためであったと語っている。続けて今は、あの世の怪談ではなく、この世のパケモノたちについて「社会黒幕」と題して語っているとも述べている⁶⁰。故事番組といっても、民営のラジオ局であるからスポンサーのコマーシャルも当然あり、湯筆花も「毎晩ラジオ局で怪談を語り、「空中商店」で廉価品を販売する」と紹介されるように、番組内で番組スポンサーの商品を積極的に宣伝していたようである⁶¹。いずれにせよ民国期上海のラジオ放送における故事番組において、怪談というジャンルを開拓、第一人者となった点で、湯筆花はラジオ放送における成功者といえるであろう。

次に出演者の角度から分析してみたい。表4で顕著なのは、故事番組の担者に多いのが、裴揚華、陸希希、銭死量、仲心笑、胡了然など、もともと

53

それぞれ『申報』1935年8月2日、1936年7月25日の半淞園広告。

54

『申報』1935年8月22日、出版社は上海市内の博覽書局である。

55

「出版界」『申報』1936年6月20日。

56

「播音節目」『申報』1935年12月9日。ただし「新奇故事」の具体的な内容までは特定できない。

57

湯筆花は故事番組において方正という人物とコンビで担当することが多かったが、この方正に関してどのような来歴の人物であるのか、特定できる資料は非常に少ない。「上海市故事研究会會員名冊」上海市檔案館、Q6-5-597-83、1945年10月、によれば湯筆花より2歳下で、上海出身、学歴は私塾とある。

58

湯筆花「廣播雜談」『勝利無線電』第10期、1946年12月25日、頁数なし。

59

『申報』1940年9月11日。

60

前掲「廣播雜談」。

61

前掲「越壇点将録(三)湯筆花」。

滑稽の芸人や文明戯の役者であったもの、及び徐卓呆、湯筆花、朱瘦竹など小報を拠点としていた商業ジャーナリズムの雑文家、編集者である点である。つまり当然であるが、故事という番組は、弾詞や滑稽のようにラジオ放送進出以前から存在したジャンルではなく、遊楽場や劇場で活躍していた芸人と商業ジャーナリズムに身を置いていたものが、ラジオ番組に出演するに際して新たに創設したラジオ放送特有のジャンルであったということである。

1936年9月27日に上海市内で故事番組を担当するものたちによって「上海市故事播音研究会」が設立された。同会の理事として、徐哲身、陔南軒主、湯筆花、李竹庵、顧夢痴、李昌鑑、葉乙好、錢无量、顧醒愚、候補理事として、陳楹峯、紀範三、徐石橋、監事として、裴揚華、黃迺明、董嘯谷、方正、沈惠堂、候補監事として高志臣が、それぞれ選出されている⁶²。これを見ると鉞子書(滬書)の芸人である陔南軒主(徐道明)のように、滑稽や文明戯関係者及び商業ジャーナリズム関係者以外の出身者として特定できるものものもいるが、その多くは履歴が不明なものが多い。また表4からは、演劇史的には前章で触れた小報『羅賓漢』の創刊、演劇評論家として有名な朱瘦竹も、1940年代に入るとラジオの故事番組に出演していることがわかる。湯筆花は朱瘦竹にラジオ放送へ出演するきっかけを作ったのが自分であると記している⁶³。上海市故事播音研究会の上部組織として「上海游芸聯誼社」があったが、湯筆花は莊海泉、顧劍秋とともに同社の常務監事にも選出されている⁶⁴。上海市故事播音研究会の後続団体として戦後内戦期の1946年、上海市故事研究会が設立されると、湯筆花は引き続き理事に就任している⁶⁵。同業組合における役職から見ても、湯筆花が上海ラジオ放送における故事番組を代表する人物の1人であったことは確かである。

最後に時間帯からも故事番組を検討してみたい。表4を見ると、1939年6月も1947年2月も深夜にあたる22時以降に故事番組が非常に多いことがわかる。特に1939年6月の方では最も遅い故事番組で28時つまり翌朝4時に放送を終えている。1939年6月の放送で24時以降に放送が始まる番組は、故事が27、弾詞と評話が合せて9、レコードが7、申曲(滬劇)と滑稽がそれぞれ3であるから、深夜放送において故事番組の占める割合の高さは突出していることがわかる⁶⁶。深夜に放送される番組として音楽等の要素が少ない静かな内容のものが歓迎されるのは想像に難しくなく、その点で1人の出演者が物語を語る故事は相応しいものであった。「ラジオ番組の中で最も放送時間の遅いのが故事番組で、翌朝4時まで放送しているものもある。最もかわいそうなのがこういった夜の番組で、聴取者は夜更かしする資産階級が多いのに対し、放送している方はしんどくて楽ではない」と湯筆花も語っている⁶⁷。

以上本章ではラジオ放送における湯筆花について故事番組を中心に明らかにしてきたが、湯筆花はラジオ雑誌の編集にも携わっていた。戦後内戦期に

62
「故事播音研究会昨成立」『申報』1936年9月28日。

63
前掲「廣播雜誌」。

64
「上海游藝社選舉職員」『申報』1939年8月22日。

65
「上海市故事研究会會員名冊」上海市檔案館、Q6-5-597-4、1946年。

66
前掲『無線電』第六期(越聲專号)。

67
湯筆花「播音生活(下)」『申報』1939年2月5日。

刊行されていた『勝利無線電』がそれで、第12期から張元賢、於斗斗、蓮花館主と共に編集者に名を連ねている。同誌の発行人呉啓明によって湯筆花は「かつては小報の健将、現在は故事の大家」と紹介されている⁶⁸。この時点ですでに湯筆花は、小報における編集者、雑文家として以上にラジオ放送において故事という番組を確立させた放送人としての地位を築き上げていたのである。

3. 政権移行と上海における小報、民営ラジオの消滅

1949年10月1日の人民共和国成立は中国社会の全領域に変容をもたらしたが、湯筆花がまさに拠点としていた上海の小報と民営ラジオ放送というメディアは、消滅という中でも最も大きい変容を余儀なくされた。本章は上海最後の小報であった『亦報』記載のラジオ番組表を中心に、湯筆花のラジオ放送との関わり、更に人民共和国成立を機に、上海のラジオ放送において故事番組とそれを担当とするものが直面した変容につき明らかにしていきたい。

1949年以降、上海のラジオ放送において最初に批判の対象とされたのが滑稽芸人の筱快樂(1917-1982)である。スポンサーや聴取者に配慮し、「政治に関することと社会風化を害することは絶対に禁止」を旨とするラジオ放送であったが⁶⁹、戦後内戦期上海における筱快樂の、番組内であえて政治的発言を行い、批判する対象を口汚く罵倒するやり方は物議を醸しながらも一方で熱狂的な支持を受け、戦後内戦期上海を代表するメディア人となった⁷⁰。1947年5月には当時攻撃していた米商らによって放送するラジオ局と自宅が襲撃に遭う事件まで発生している⁷¹。上海を代表する夕刊紙『新民晩報』には、人民共和国成立直前の1949年7月あたりから筱快樂を批判する記事が多く掲載されるようになり⁷²、同年8月1日、筱快樂は国民党と密接に繋がり、反共的な放送を行ったという理由で市の公安局に逮捕されるに至る。そして同年8月31日19時45分から15分間、大中華・大陸ラジオ局に出演、自らの過ちを懺悔している⁷³。その後筱快樂はほぼ活動中止を余儀なくされ、間もなく中国国内から離れていった。

ラジオ局としては、上海が共産党統治下となった1949年5月27日、国民党の上海広播電台が接収管理されて「上海人民広播電台」が、1950年4月1日には華東行政区の公営ラジオ局として「華東人民広播電台」がそれぞれ設立され、上海市内の2つの公営ラジオ局が5つの周波数を使用することとなった。1951年になると公営ラジオ局が占める周波数はさらに6に増え、それに対し民営局の方は1局に周波数がそれぞれ割り与えられるのではなく、19の局が11の周波数を共有し合うという形態がとられるようになった⁷⁴。

68

呉啓明「紹介四位編輯先生」前掲『勝利無線電』第12期。

69

湯筆花「播音生活(中)」『申報』1939年2月4日。

70

戦後内戦期の筱快樂に関しては、拙稿「ラジオ時代の「滑稽」—筱快樂と〈社会怪現象〉」『中国 社会と文化』第二十二号、2007年、183-199頁を参照。

71

米商による襲撃事件に関しては、馬軍、笹田和子「筱快樂事件—1947年5月上海米潮中的一段挿曲」『社会科学研究』(四川省社会科学院、第4期(総159期)、2005年、151-157頁を参照。

72

袁雪芬「可惡的反動走狗筱快樂」『新民晩報』1949年7月11日を皮切りに、同紙に筱快樂への批判記事が多く掲載されるようになった。

73

筱快樂逮捕に関しては、「筱快樂逮捕」『新民晩報』1949年8月3日、ラジオにおける懺悔放送に関しては「筱快樂昨廣播 坦白表示悔悟」『新民晩報』1949年9月1日。

74

大公報出版委員会編『新上海便覧』上海大公報出版社、1951年、188-189頁。

このような民営ラジオ局の放送下において、湯筆花は1950年5月に「故事不離教育」と題した記事を発表、故事番組は大眾にとって精神の食糧であるから、これまでのように思想を歪曲し、封建的迷信的な毒素に溢れたものではなく、教育、科学、工業、農業を提唱して聴取者が楽しみながらも益になるものに改良すべきであると主張している⁷⁵。これまでまさに迷信的な怪談を売りにしてきた湯筆花であるが、人民共和国成立から1年近く経過し、時代に即した新しいラジオ番組の方向性に確信が持てたようである。この記事発表から数ヶ月後には、ラジオ放送において教育番組を重視することも提唱している⁷⁶。

人民共和国成立した1949年10月、湯筆花自身は「元昌鶴鳴」ラジオ局にて、朝の7時15分から8時15分と、12時から13時までそれぞれ「尺牘と作文」、9時から10時まで故事と、3番組を担当して、この時点では相変わらずラジオ放送を拠点としていた⁷⁷。注目すべきは出勤前と昼休みの時間に手紙と文章の書き方に関する番組を放送している点で、上記の記事を発表する半年以上前からすでに教育、啓蒙的番組を実践していたことになる。同年10月30日からは元昌鶴鳴にて朝の7時半から8時半が尺牘と作文、8時半から9時半が方正との故事、9時から10時が中華自由で方正との故事と掛け持ちしており、民国期深夜に集中していた湯筆花の番組は完全に朝型へ移行していた⁷⁸。翌1950年1月1日からは放送局を「建成新声」に移し、午前9時から10時まで方正との故事番組のみとなり⁷⁹、3月まで続いた。2ヶ月の空白期間を経て、1950年5月から「滬声元昌」局にて「作文」番組が始まり⁸⁰、6月には同局内にて「尺牘」番組が、8月にはさらに「識字」が追加された⁸¹。1950年10月15日時点で湯筆花による尺牘、作文、識字等の教育的番組はなくなっている⁸²。このような1950年における湯筆花の番組内容と放送時間の目まぐるしい変動は、周波数割当の問題で民営ラジオ局の組み合わせが流動的であったことも要因である。湯筆花最後のラジオ番組は1950年10月から12月までの、「亜洲福音」局における故事番組で、放送時間は15時から16時、やはり方正とのコンビであった⁸³。政権移行を機に、文章や識字といった教育啓蒙番組を担当するようになった点は、これまで社会の動向や新しいメディアの勃興に敏感に反応してきた湯筆花らしいといえる。

上海における民営ラジオ局が1952年10月に1局に統合される以前の段階で湯筆花がラジオ放送から離れたのは理由がある。1951年1月に設立された越劇女優の養成団体「群立越芸社」の副社長に就任したためである。同社は民営ラジオ局を運営していた竺文浩が設立、社長には長年湯筆花と故事番組でコンビを組んでいた方正が就任し、1951年10月27日に27名の学生を迎えてスタートした⁸⁴。湯筆花にとっては長年後方支援にまわっていた越劇に、ラジオ関係者とともに直接関与することになったわけで、複数のメディアを

75
『文匯報』1950年5月28日。

76
湯筆花「怎樣推進廣播事業？」『文匯報』1950年10月1日。

77
「全市廣播電台最新節目表 第九期」『亦報』1949年10月2日。同紙の番組表によれば湯筆花は元昌鶴鳴で故事番組を放送中の9時から10時にかけて、「中華自由」ラジオ局でも方正と故事番組を放送していることになっており、二重出演となっている。

78
「全市廣播電台最新節目表 第十三期」『亦報』1949年10月30日。

79
「全市廣播電台最新節目表 第二十二期」『亦報』1950年1月1日。

80
「全市廣播電台最新節目表 第四十期」『亦報』1950年5月7日。放送時間は朝7時35分から8時までである。

81
それぞれ「全市廣播電台最新節目表 第四十五期」『亦報』1950年6月11日、「全市廣播電台最新節目表 第五十四期」『亦報』1950年8月13日。放送時間であるが、6月は7時から7時25分が尺牘、7時35分から8時が作文、8月は7時から7時20分が尺牘、7時20分から7時40分が識字、7時40分から8時までが作文である。

82
「全市廣播電台最新節目表 第六十二期」『亦報』1950年10月15日。

83
同上。

84
竺文浩がどのラジオ局の経営者であったのかは不明である。程叔銘主編『廣播群像』天下書報社、1951年には顔写真付きで19人の上海の民営ラジオ局の経営者が紹介されているが、そこに竺文浩の名前は掲載されておらず(8-11頁)、元経営者の可能性もある。

横断し続けた湯筆花らしい選択といえる。同社は15歳前後の学生を集め、「雯」の1字を入れた芸名が付けられた。1953年1月、同社の卒業生によって「群立越劇団」が設立され、1954年まで活動を続けた⁸⁵。上海の越劇においては、学校システムによらぬ旧来の養成団体として最後の団体となった。表1によれば、1952年には張慧忠魔術団へ入団していることから群立越芸社の学生が卒業する以前に同社を離れた可能性もある。張慧忠魔術団では広報を担当し1959年に退団しているが、この退団は年齢的に考えると定年を迎えたと解釈すべきであろう⁸⁶。

湯筆花がラジオ放送から離れた1951年の時点で、故事番組自体は放送が存続していた。『広播群像』には9組11人の故事番組担当者が紹介されているが、この内、陔南軒主、牛馬走(徐卓呆)、楊樂郎、喬柳浪、朱瘦竹、李昌鑑、沈朔風の7人は表4の民国期でも故事番組を担当していた⁸⁷。しかし1952年10月1日、16の民営ラジオ局が1局に統合され「上海聯合広播電台」が成立し、1953年10月には上海人民広播電台に吸収され上海から民営ラジオ局が完全に消滅、1955年にはもう1つの公営ラジオ局であった華東人民広播電台が放送を停止し、上海市内に上海人民広播電台1局のみと移行していく中で、民国期から故事番組を担ってきたものたちもラジオ放送から消えていった。上海人民広播電台の番組情報誌『毎週広播』を見ると、故事番組は娯楽番組ではなく、文芸番組欄の一角にて紹介されており、放送時間は13時半から14時と、18時半から19時、あるいは20時から20時半の1日2回で、語る内容は、周立波作『鉄水奔流』、李未芒作『密林風雪夜』、劉知俠作『馬尾松種子』、克非作『陰謀』、といった革命文学が主となっていった⁸⁸。民国期の故事番組は主に民営ラジオ局が放送し、小報の編集者や執筆者が多くを担っていたのであるから、小報も民営ラジオ局も消滅した政権移行後に故事番組が大きく

変容するのをもまた当然の帰結であった。



図5 故事番組の出演者たち(程叔銘主編『広播群像』天下書報社、1951年、48頁)、牛馬走(右上)は徐卓呆、朱瘦竹(右下)も掲載されているが湯筆花はいない。

85
前掲『上海越劇志』、94頁。

86
湯筆花の張慧忠魔術団への入団と退団に関しては、前掲「百年越劇的三位幕後英雄」のみが指摘するもので、一次資料でそれを裏付けるものは現段階でない(57頁)。

87
前掲『広播群像』、48-49頁。他の4名は曾水手、沈克と李燕飛、李燕燕で後2者は李昌鑑とのトリオである。

88
『毎週広播』第33期、1955年8月15日、第76期、1956年6月11日、をそれぞれ参照。

おわりに

1920年代から1950年代にかけ、湯筆花は小報、映画誌（紙）、ラジオ放送、越劇専門紙、越劇養成団体と、上海の様々な新しいメディアを横断してきた。人民共和国に入り、拠点としてきた民営ラジオ局と小報が消滅、さらに「単位」制度など所属が固定化される中、湯筆花のような、関心の赴くまま横断的に複数のメディアに関与することは難しくなった。新しい社会の建設が叫ばれる状況下で、懐古的な雑文に対する需要も民国期に比べ大幅に減少し、湯筆花が得意とした分野は発表の場を失っていった。

湯筆花と同様、小報の編集で名を馳せ、その後ラジオ放送に進出して故事番組を担当した朱瘦竹は、人民共和国期に入ってもラジオの深夜にて水滸伝を語る故事番組を続け、評話の芸人として1950年代には上海評弾協会に所属、1960年には上海江南評弾団に入団して定年を迎えた⁸⁹。つまり朱瘦竹は自分が得意とする中国伝統演劇の知識を活かして古典小説の語りに特化し、最終的に語りプロとして業界内外から認知され、後半生を全うしたといえるであろう。朱瘦竹のメディア人としての在り方は、ディレクターととして複数のメディアを横断し続けた湯筆花とは対照的である。しかし特定の分野の専門家におさまることなく、新しいメディアにアンテナを張り、それに特に躊躇せず参入していく軽みこそ湯筆花の本領であり、それこそが民国期上海のメディア人の1つの典型と考える。

89

徐幸捷、蔡世成主編『上海京劇志』上海文化出版社、1999年、452頁。

付記：本稿の作成に当たり、立命館大学の三須祐介先生に資料閲覧の便宜を
図っていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。